

準相対論的な Pauli-Fierz 模型のスペクトル解析

日高建* (九州大学大学院数理学研究院)

1 はじめに

本研究は、九州大学の廣島文生先生との共同研究に基づくものである。粒子と量子場が相互作用をする系を考える。非相対論的 Pauli-Fierz 模型は、量子電磁力学の模型で、非相対論的な粒子と量子輻射場 A がミニマル結合したものである。粒子は、 $L^2(\mathbb{R}^d)$ 上シュレーディンガー作用素 $-\frac{1}{2M}p^2 + V$ に従うとする。ここで、 M は粒子の質量であり、 $p = -i\nabla$ は粒子の運動量、 V は外部ポテンシャルである。また、ヒルベルト空間 \mathcal{H} 上で作用する自由場のハミルトニアンを H_f とする。このとき、非相対論的 Pauli-Fierz 模型の全ハミルトニアンは、 $L^2(\mathbb{R}^d) \otimes \mathcal{H}$ 上で

$$H_{PF} = \frac{1}{2M} (p \otimes \mathbb{1} - A)^2 + V \otimes \mathbb{1} + \mathbb{1} \otimes H_f$$

となる。[Hir00, Hir02, HH08] において、 H_{PF} は \mathcal{H} 上の下に有界な自己共役作用素であることが示されている。ハミルトニアンのスペクトルの下限を基底エネルギーといい、それに対応する固有ベクトルを基底状態という。基底エネルギーがハミルトニアンの固有値でなければ、基底状態は存在しない。非相対論的 Pauli-Fierz 模型のハミルトニアン H_{PF} は基底状態をもつことが [BFS99, GLL01, Hir99] 等で証明されている。

一方、準相対論的な Pauli-Fierz 模型は、量子輻射場 A と準相対論的なシュレーディンガー作用素 $\sqrt{p^2 + M^2} + V$ に従う粒子がミニマル結合した模型である。[KMS11, KM12] において、静止質量 M が正の場合に H が基底状態をもつことは既に示されている。ハミルトニアンの自己共役性と基底状態の存在を $M = 0$ の場合も含めて示すことが目的である。

2 準備

複素ヒルベルト空間 $W = \bigoplus_{d-1} L^2(\mathbb{R}^d)$, $d \geq 3$ 上のボソンフォック空間 \mathcal{F} は $\mathcal{F} = \bigoplus_{n=0}^{\infty} \mathcal{F}_n(W) = \bigoplus_{n=0}^{\infty} [\otimes_s^n W]$ で与えられる。ここで、 \otimes_s^n は n 重対称テンソル積を表す。

*email: t-hidaka@math.kyushu-u.ac.jp

また, $\otimes_s^0 W = \oplus^{d-1} \mathbb{C}$ とする. \mathcal{F} のベクトルは $(\Psi^{(0)}, \Psi^{(1)}, \Psi^{(2)}, \dots), \Psi^{(n)} \in \otimes_s^n W$ と表せる. $\Omega = (1, 0, \dots) \in \mathcal{F}$ をボソソフック真空という. 次に, フォック空間上の重要な作用素を導入する. $f \in W$ によって均された (ボソソ) 生成作用素 $a^\dagger(f)$ と (ボソソ) 消滅作用素 $a(f)$ を次のように定義する.

$$D(a^\dagger(f)) = \left\{ \Psi \in \mathcal{F} \mid \sum_{n=1}^{\infty} n \|S_n(f \otimes \Psi^{(n-1)})\|^2 < \infty \right\},$$

$$(a^\dagger(f)\Psi)^{(n)} = \sqrt{n} S_n(f \otimes \Psi^{(n-1)}), n \geq 1, \quad (a^\dagger(f)\Psi)^{(0)} = 0,$$

$$a(f) = (a^\dagger(f))^*.$$

ここで, $D(T)$ は線形作用素 T の定義域を表す. $a(f)$ と $a^\dagger(f)$ は次の正準交換関係を満たす:

$$[a(f), a^\dagger(g)] = (\bar{f}, g)_W, \quad [a(f), a(g)] = 0 = [a^\dagger(f), a^\dagger(g)].$$

$\tilde{f} = (0, \dots, 0, \overset{r\text{-th}}{f}, 0, \dots, 0) \in W$ に対して, $a^r(f) = a(\tilde{f})$ と表す. 稠密に定義された W 上の可閉作用素 T に対して, 第二量子化作用素 $d\Gamma(T)$ を

$$d\Gamma(T) = \oplus_{n=0}^{\infty} [\otimes^n T^{(n)}]$$

によって定義する. ここで, $T^{(n)}$ は

$$T^{(0)} = 0, \quad T^{(n)} = \overline{\sum_{k=1}^n 1 \otimes \dots \otimes 1 \otimes \overset{k\text{-th}}{T} \otimes 1 \dots \otimes 1}_{\otimes_s D(T)}$$

である.

2.1 準相対論的な Pauli-Fierz 模型

準相対論的な Pauli-Fierz 模型における状態ヒルベルト空間を $\mathcal{H} = L^2(\mathbb{R}^d) \otimes \mathcal{F}$ とする. 静止質量が $M \geq 0$ のとき準相対論的なシュレーディンガー作用素は $L^2(\mathbb{R}^d)$ 上で

$$\sqrt{p^2 + M^2} + V \tag{2.1}$$

によって与えられる. 外部ポテンシャル V に以下の仮定をする.

Definition 2.1 次の条件 (1) を満たす V の集合を V_{rel} , (2) を満たす V の集合を V_{conf} とする.

(1) $D(\sqrt{p^2 + M^2}) \subset D(V)$ であり, ある $0 \leq a < 1$ と $b \geq 0$ が存在して,

$$\|Vf\| \leq a\|\sqrt{p^2 + M^2}f\| + b\|f\|$$

が任意の $f \in D(\sqrt{p^2 + M^2})$ に対して成立する.

(2) $V \in L^2_{\text{loc}}(\mathbb{R}^d)$ は非負であり, $\mu = 1, \dots, d$ に対して $D_\mu V, D_\mu^2 V \in L^\infty(\mathbb{R}^d)$. さらに, $D(V) \subset D(|x|)$.

運動量 $k \in \mathbb{R}^d$ におけるボソン 1 個のエネルギーを表す関数を $\omega(k)$ とする.

Assumption 2.2 $\omega \in C^1(\mathbb{R}^d; \mathbb{R}), \nabla\omega \in L^\infty(\mathbb{R}^d), \inf_{k \in \mathbb{R}^d} \omega(k) = m \geq 0, \lim_{|k| \rightarrow \infty} \omega(k) = \infty$.

この仮定における $m > 0$ はボソンの仮想的な質量を表す. 自由場のハミルトニアン H_f は W 上の掛け算作用素 $\oplus^{d-1}\omega$ の第二量子化作用素として与えられる. 従って,

$$H_f = d\Gamma(\oplus^{d-1}\omega).$$

d 次元偏光ベクトル $e^r(k) = (e_1^r(k), \dots, e_d^r(k))$ は, $k \in \mathbb{R}^d \setminus \{0\}$ と $r = 1, \dots, d-1$ に対して $e^r(k) \cdot e^s(k) = \delta_{rs}$ と $k \cdot e^r(k) = 0$ を満たすベクトルとして与えられる. $\hat{\varphi}$ を以下の仮定を満たす紫外切断関数とする.

Assumption 2.3 $\hat{\varphi}/\sqrt{\omega}, \omega\sqrt{\omega}\hat{\varphi} \in L^2(\mathbb{R}^d), \hat{\varphi}(k) = \overline{\hat{\varphi}(-k)}$.

各 $x \in \mathbb{R}^d$ に対して, 量子輻射場 $A(x) = (A_1(x), \dots, A_d(x))$ は \mathcal{F} 上で次のように与えられる.

$$A_\mu(x) = \frac{1}{\sqrt{2}} \sum_{r=1}^{d-1} \left\{ a^{\text{tr}} \left(\frac{\hat{\varphi} e_\mu^r e^{-ik \cdot x}}{\sqrt{\omega}} \right) + a \left(\frac{\hat{\varphi}(-\cdot) e_\mu^r e^{ik \cdot x}}{\sqrt{\omega}} \right) \right\}.$$

$\hat{\varphi}(k) = \overline{\hat{\varphi}(-k)}$ ならば $A_\mu(x)$ は本質的に自己共役である. 自己共役拡大も同じ記号 $A_\mu(x)$ で表すことにする. \mathcal{H} は $\int_{\mathbb{R}^d}^\oplus \mathcal{F} dx = L^2(\mathbb{R}^d; \mathcal{F})$ と同一視できる.

次に, ミニマル相互作用 $p \rightarrow p \otimes \mathbb{1} - A$ を導入して全ハミルトニアンを定義する. $(p \otimes \mathbb{1} - A)^2$ の本質的自己共役性について次のことが知られている.

Proposition 2.4 *Assumption 2.2* と *2.3* を満たすとする. このとき, $D(p^2 \otimes \mathbb{1}) \cap C^\infty(\mathbb{1} \otimes N)$ 上で $(p \otimes \mathbb{1} - A)^2$ は本質的に自己共役である. ここで, $C^\infty(\mathbb{1} \otimes N) = \bigcap_{n=1}^\infty D(\mathbb{1} \otimes N^n)$ である.

$(p \otimes \mathbb{1} - A)^2$ の自己共役拡大も同じ記号で表す. スペクトル分解定理によって自己共役作用素 $\sqrt{(p \otimes \mathbb{1} - A)^2 + M^2}$ を定義する. 準相対論的な Pauli-Fierz 模型は \mathcal{H} 上で

$$H = \sqrt{(p \otimes \mathbb{1} - A)^2 + M^2} + V \otimes \mathbb{1} + \mathbb{1} \otimes H_f,$$

$$D(H) = D(\sqrt{(p \otimes \mathbb{1} - A)^2 + M^2}) \cap D(V \otimes \mathbb{1}) \cap D(\mathbb{1} \otimes H_f).$$

によって定義される.

$$\mathcal{H}_{\text{fin}} = L.H.\{f \otimes \Omega, f \otimes a^\dagger(h_1) \cdots a^\dagger(h_n)\Omega | h_j \in C_c^\infty(\mathbb{R}^d), j = 1, \dots, n, n \geq 1\}.$$

とおく.

3 主定理

Theorem 3.1 $V \in V_{\text{conf}} \cup V_{\text{rel}}$ とし, *Assumption 2.2* と *2.3* を満たすとする. このとき, H は下に有界な作用素で, $D(|p|) \cap D(V) \cap D(H_f)$ 上で自己共役, \mathcal{H}_{fin} 上で本質的に自己共役である.

Theorem 3.2 $m > 0$, $V \in V_{\text{conf}}$, $\lim_{|x| \rightarrow \infty} V(x) = \infty$ とし, *Assumption 2.2* と *2.3* を仮定する. $\sigma_{\text{ess}}(H)$ を H の本質的スペクトルとする. このとき, すべての $M \geq 0$ に対して $\sigma_{\text{ess}}(H) = [E + m, \infty)$ が成立する. また, 基底状態は一意的である. 即ち, E を H の基底エネルギーとすると,

$$\dim \ker(H - E) = 1.$$

参考文献

- [BFS99] V. Bach, J. Fröhlich and I. M. Sigal, Spectral analysis for systems of atoms and molecules coupled to the quantized radiation fields, *Commun. Math. Phys.* **207** (1999), 249–290.
- [GLL01] M. Griesemer, E. H. Lieb and M. Loss, Ground states in non-relativistic quantum electrodynamics, *Invent. Math.* **145** (2001), 557–595.
- [HH08] D. Hasler and I. Herbst, On the self-adjointness and domain of Pauli-Fierz type Hamiltonians, *Rev. Math. Phys.* **20** (2008), 787–800.
- [Hir99] F. Hiroshima, Ground states of a model in nonrelativistic quantum electrodynamics II, *J. Math. Phys.* **41** (2000), 661–674.
- [Hir00] F. Hiroshima, Essential self-adjointness of translation-invariant quantum field models for arbitrary coupling constants *Comm. Math. Phys.* **211**, (2000), 585–613.
- [Hir02] F. Hiroshima, Self-adjointness of the Pauli-Fierz Hamiltonian for arbitrary values of coupling constants, *Ann. H. Poincaré* **3** (2002), 171–201.
- [KMS11] M. Könenberg, O. Matte and E. Stockmeyer, Existence of ground states of hydrogen-like atoms in relativistic QED I: the semi-relativistic Pauli-Fierz operator *Rev. Math. Phys.* **23** (2011), 375–407.
- [KM12] M. Könenberg and O. Matte, Ground states of semi-relativistic Pauli-Fierz and no-pair Hamiltonians in QED at critical Coulomb coupling, arXiv:1106.1393.